

2018年度以降の将来を考えると共に今までの三ヵ年を振り返る：シリーズ1

2015年度～2017年度 三か年ビジョン 目に見えない資産を理論化する

『介護ロボットと未来をどう捉えるか』

【まえがき】「ロボット導入と人員換算緩和」（10/13 日経朝刊 介護ロボットと未来）みなさんは、この記事を読んでどのように考えますか？人もいない、ロボットもない。介護現場が成り立たない事業所が増えていいたら我々は、今まさに、何を考え、行動し、実績として残していくべきなのでしょうか、という問いに対するケア専門職からの回答です。我々、社会福祉法人海光会が大きな日本社会が迎えている高齢社会に対して、どのようなスタンスをもって仕事をしているのかを知っていただける内容となっています。

- 数年後には介護や医療の現場にも最先端のロボット技術が投入されるだろうと、ある種神話のように多くの人が疑うこともなく信じている現状があると思います。私自身もそのように考えていましたが、この記事にあるように実際はそこまで明るい未来ではないようです。高齢社会の中で介護の担い手が追いつかず、ロボットの貢献もまだまだ先になりそう。しかし、利用者や代理人からの要望はより複雑化していくのではないのでしょうか。その中で支えになるものはやはりこれまで海光園が積み上げてきた基礎や実績ではないかと思えます。この積み重ねが今後の1つの指標になり、また何より職員にとっての自信になるはずです。より一層醸成させることで時代の流れに左右されにくい組織になるのではと感じます。
- この先何十年の単位でみるのであれば、介護職員の離職が多いのは、やはり人に依存した労働量が多い点ではないでしょうか。特養では85歳以上の高齢のみならず身体および認知症度合いの重度者が入居されていることから、求められることが年々レベルが高くなってきています。しかし、人的資源には限りがある。顧客の状況が変わっていくならば、“今まで”のサービスをやめ、何が最重要なのかを随時検証し、優先していくしかありません。人口減少は避けられない未来です。ロボットが、どれだけ人に近づけるかではないでしょうか。
- 介護する人が減り介護される人が増えていく。そんな中、私達がしなくてはいけないことは、今いる「人」を大切にすること。そして、現在進めている機器に変われるところをみつけて導入することではないかと思えます。介護ロボット技術が進み、ロボットで人員換算が出来るようになるまでは、やはり介護に人は欠かせないのではないのでしょうか。そして、私達は機器導入の事例を作り、外部に発信していくことも引き続きやっていかなくてはならない事だと思えます。
- 私たちに今出来る事は、現在使用している機器たち、または今後取り入れていく機器の効果を事例とし、発信していく事ではないでしょうか。効果が予測できないから購入出来ないと悩んでいる施設があれば、私たちの事例を見て導入してみよう、そう思ってもらえれば、その輪は広がり、介護職は重労働であるという事を払拭するきっかけに繋がるのではないかと考えます。
- この記事を読んで、まだまだ介護ロボットの普及が進んでいない現状を再確認できました。海光園はその中ではいろいろと先進して導入できていて改めて強みだと感じます。いつかロボットが人に変わるという時代は来るかもしれませんが、それが実現するためにはこの先何十年とかかってしまうと思います。一つの評価として、このロボット導入が加算報酬など目に見える形で評価される事は喜ばしいですが、そもその人という財産をしっかり守り育てるという事も合わせて重要な事だと考えます。

- 高齢者を支える、杖となる人材を育てながら、介護の未来が今より少しでも明るい、あたたかいイメージに払拭できたらと思います。その時代には、人とロボットがもっと身近に共存しながら高齢者を支えているかもしれない。人もいない、ロボットもないという介護現場の破綻は考えたくない。この施設があってよかったと感じていただけるものを組織として成り立たせ、今やっていることが成果として残し社会に役立つことへつないでいきたいです。
- 記事にある通り、現時点では介護の負担が全くなくなるという夢のような介護ロボットは開発されていませんが、今我々にできることは、積極的に最先端の機器を導入し、現場での実績や事例を作って、福祉機器のメリットやあるいはデメリットも含め、世の中に発信していく事だと思います。そうすることで、少しでも介護ロボットの普及や新しい機器の開発の手助けにつながるのではないかと思います。

以上

社会福祉法人海光会 ヒヤリング
シリーズ1
2017.10.16